
～ 7 月 6 日曇り時々晴れ～

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～7月6日曇り時々晴れ～

【Nコード】

N71880

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

大事な会議の朝、寝坊、そんな死にたくなるようなこともすべて神様に決められていることかもしれません。

そんなお話。

（前書き）

この世の流れが、誰かに決められている。

そんなこと思ったこと、ありませんか？

人生ってものを考えたことはあるだろうか？

人は考える葦であるっていった哲学者もいたけど（葦って結局なんなんだ？）俺にもこれを読んでいる君にも、「人生とは」なんて語ることもなんかできないんじゃないかな。

だって、人はたゆむことのない時間の中を、ただ流され続けているだけだから。

俺たちには抗いきれない何かに、突き動かされているだけなんだから。

大方、この宇宙はばかでかい何か生き物が作った実験空間で、そこで死んだり生きたり笑ったり泣いたり怒ったりしている人間なんかを見て、そのでかい生き物はまた、笑ったり泣いたり怒ったりしているのかもしれない。

そう考えると、生きていくのもアホらしくなってしまわないかな。

君たちが怒ったり笑ったりして浮いたり沈んだりしているのを、優雅に眺めている何かがいると思うと。

今日は、そんなことを考えて生きることがアホくさくなった男のちよっと不思議な話をしてみることにする。

男は、目を開けた。

チュンチュンという鳥の鳴き声がさわやかな朝を演出しているにもかかわらず、男の頭は重かった。昨日の酒がまだ残っているようだ。

時計を見る

「7月6日AM9:32」

デジタルの時計が青い光を放っていた。

見た瞬間に、寝ぼけた頭に冷水をかけられたようになった。会社に行く時間は、仕事に行く時間はもうとつくに過ぎていた。

今日は、大事なミーティングの日。俺の持つ資料がないと始まらない。

昨日は遅くまで残ってその資料を作って…

「できたー」ってことで、家に帰ってきて、前祝だって酒を飲んだった。

ビール1本しか飲んでないよな…

ベッドから飛び起きると、足元にあったものを蹴飛ばした。

500mlの缶が3本。記憶を飛ばしたようだった。

とりあえず、携帯をチェックする。ピカピカとライトがついており、それはまるで死刑執行の印のようにも思えた。

顔も洗わずに、大急ぎで着替え、車に飛び乗る。

会議は9時からだった。今から飛ばせば、10時には着けるはず。

先方にはどうやって言い訳しよう…車が壊れてJAF…携帯はトイレに落としてて…

12年乗っている古いカローラは、つたないエンジン音を上げながら発信した。

とりあえず、会社に連絡を…いや、待てよ、携帯が壊れてて、それでも急いだ間を出したほうが…寝癖はどうやってごまかすんだ…

前を走るシビックにイライラしながら、車を飛ばす。いつもなら絶対にしないが、ウォンウォンと煽ってみる。

一向にスピードを上げないシビック、しびれを切らした男は追い越しにかかった。

目の前にトラックがいた。それが男の最後に見た瞬間だった。

男は、目を開けた。

チュンチュンという鳥の鳴き声がさわやかな朝を演出しているにもかかわらず、男の頭は重かった。

トラックは…？あれ？俺、会社…へ？

時計を見る。

「7月6日AM9:32」

デジタルの時計が青い光を放っていた。

あー、夢だったんだー良かった、良かった。

すごくリアルな夢だったな。すみずみまで鮮明に覚えてるや。

夢で良かった。死なずに済んだ。

…良くないぞ、ミーティングは？

ベッドから、猛烈な勢いで男は飛び出した。

携帯をチェックする。チカチカとライトを呼んでいる。

無視して、顔を洗った。少し目が冴え、思考も冴える。

とりあえず、会社に連絡をしたほうが良さそうだ。

しかたなく、携帯を開き、会社に電話をかける。

1、2コールで、相手が出た。

「はい、丸仏商事です。」

「すみません、内線10番お願いします。勤務していた佐々木です。」

」

「…佐々木さん？」

「はい、すみません、ミーティングなのに遅れちゃって、早くつないでください」

「…いたずらはやめてください。佐々木さんなら、1年前に交通事故で亡くなりました」

「はい？よく聞こえなかったです？いいから、早くつないでください！」

「これ以上言うなら、警察に通報しますよ。命日になんていたずらをするんですか？」

「命日？誰の？」

「佐々木さんのですよ。1年前の今日、交通事故でトラックにぶつかって、亡くなったんですよ。いたずらはやめてください」

ガチャン。受話器をたたきつけられた。

ツーツーッ。

男は口を開いたまま、携帯を取り落とした。

え？俺が死んだ？トラックと事故で？

ふらふらとベッドに腰をかける。

何かの間違いだ。おかしい。俺はだって、こうして生きているじゃないか。

携帯を拾い、カレンダーをチェックする。

そこには、

「2008・7・6」

とあった。

今年は2007年だったよな…なんてこった。

これは夢だと言い聞かせながら、洗面台に行き、頭から水をかぶる。

心地いい水は頭に刺激を与えてくれたが、夢を覚ますにはいたらなかった。

ビシャビシャの頭で鏡を見る。昨日までの自分と同じ。頬をつねってみようかと思ったけど、あまりにお約束なのでやめた。

どうやら俺は死んだらしい。1年前に。

自分の居場所がこの世にないというのは、不思議な感覚だった。

俺は、携帯電話にあった番号に片っ端から電話をした。

親兄弟恋人、みんな会社の受付嬢と同じ反応だった。気持ち悪がられて切られる。

今まで一番硬いと想っていた絆も、1年という年月が簡単に切ってしまったようだ（ま、死人から電話がかかってきては無理もないが）
ア行からかけていた電話も簡単にワ行まで来た。最後に残ったのは、「和田敦」、大学の時の友人でいつあったのかも覚えていない奴だった。

トウルル…

「はい、和田です」

「あ、久しぶり。佐々木…だけど。」

「おーーーーー！佐々木か！久しぶりだなあ！」

ん？反応が違う。

「大学を卒業してからだから、3年ぶりか？元気だったか？」

どうやら俺が死んだことを知らなかったらしい。

「あ、ああ。ま、元気っていったら元気かな。」

「どうしたこんなに朝早くから、たまたま俺は今日非番だったから良かったけど、なんかあったのか？」

「いや、特に用事って程じゃないんだけど・・・あ、今日の夜とか暇かな？」

とつさに言葉が出た。今の俺は、一人の人間としてみてくれる和田の存在がありがたかった。

「え？今日か？暇だけど…あ、わかったぞ、飲みに行く奴を探してたんだな？」

「あ、ああ。ま、そんなところかな。で、大丈夫なのか？」

「ああ、いいぜ。久しぶりだな。昔の居酒屋に行くか？じゃあ、7時にススキノの改札前で」

「…ああ。わかった」

電話は終わった。

どういふことかわからないけど、今、俺は死んだ人間で、俺の存在を認めてくれるのは和田だけで、その和田と今日飲みに行くことになった。

実家に帰るとか、他にやることもあるだろうけど。

信じたくないが、1年前に俺は死んでいたのだ。今、こうしている自分は誰なのかわからないけど、俺は俺だった。

ぐう。

死人でも腹が減るのだろうか？俺は、冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中には腐った食べ物たち。賞味期限の切れが調味長などが入っていた。

俺は、その辺にあった服を着て、近くのコンビニまで出かけた。

コンビニでおにぎりを買い、近くの公園でほおばる。

1年経ったコンビニおにぎりも、記憶していた味と変わらなかった。科学の進歩もたいしたことはないようだ。

食べながら考える。

なぜ俺はよみがえったのか？なぜ死んだのに今日という日を迎えているのだろうか？

普通に考えてこんなことはありえないし、誰も信じてはくれないだろう。

もちろんそんな自問自答に答えてくれる声はなく、一人悶々としたまま時間が過ぎていった。

ふと気づくと時計のハリは6時を回っていた。ずいぶん俺は考え込んでいたようだ。

俺は重い腰を上げ、ススキノに向かった。

ススキノ改札前は、人でごった返していた。そんな中、俺は大学時代とは変わらない和田を見つけた。屈託のない笑顔で和田は手を振っていた。

「ひさしぶりだなー」

大声で声をかけてきた和田といつも行っていた居酒屋に向かう。

「昔はここでよく語り合ったもんだな」と、和田。

「そうだったか？」

と俺はビールを飲みながら言った。

「そうだよ、お前はいつも「俺はビッグになってやる」っていきまいていたじゃないか」

「昔の話さ……」

「そういや、今、お前は何をやってるんだ？」

「ある会社の営業だよ。ビッグが聞いてあきれんな……そういう和田は何をやってるんだ？」

「俺は自分のやりたいことをやってるよ」

「もしかして、警察か？」

「ピンポーン。俺は警察になって悪い奴を取り締まるのが夢だったからな。まだ日は浅いから犯人逮捕はないんだけど、いつでも出勤の準備はできてるつもりだぜ」

「そっか、お前の夢だったもんな……大学の勉強はおもしろくない。俺は警察になるって、酔っ払って言ってたっけ」

「夢は願えば叶うのさ」

俺と和田は、ビールを飲みながらとりとめもない話をした。

死人と警察官。妙な組み合わせだった。

死人は言った。

「なあ、もし自分の存在がこの世の中から消されて、誰も知らない世界に行ってしまったとしたら、お前はどつする？」

「なんだ、やぶから棒に？」

「どつする？お前のことを知っている人間は誰もいない。その上、みんなお前のことは死んだって思い込んでるんだ」

「んゝよくわかんないな」

「で、どつする？」

「俺なら、誰も俺のこと知らないなら、それだけ俺のことを新しく知ることができるってことだって想う。それで、友達を増やすかな」

「ずいぶんとポジティブな考え方だな」

「だってよ、物事には2面性があつて、いいことも悪いことも見方を変えればどちらにもなるんだ。だから、それなら俺は常にいいことに見るようにしてるんだ」

「気楽な生き方だな。うらやましいよ」

「けど、この2面性の考え方ってのはすごく難しいんだよ。その日の体調とか気分で作ったりネガティブになってしまいうこともあるんだ」

「なんか分かる気がするな」

「そういう時は、何か大きなものが俺を突き動かしてるんだって思うよ。俺が必死こいて考え出したものも、実は誰かに操作されるってさ」

と、和田ははしの先でザンギをつつきながら言った。

「それって、なんか切ないな……自分の決死の判断も、実は操られて、その結果も分かりきっているってことか。その分かりきった結果で俺らは一喜一憂するのか……なんか情けない話だな」

「ま、そういうなよ。人生あんまり捨てたもんじゃないって。ところで、お前はどっして今日いきなり俺に電話かけてきたんだ？なんかつたんじゃないのか？」

「ん？いや、何もないんだ……いいんだ。もう。もうそろそろ出ようか」

俺は、返事を待つ前に席を立った。

「また飲もうな」と口約束を交わし、俺たちは別れた。

なんの因果か分からないけど、俺は死んで1年後に誰にも認められない中生き返った。それも全部、俺の意志ではない中で。

たとえ、何か意志を持ったとしても、何も変わらなかったんじゃないか。

決して抗えないことがこの世の中にはあるんだろう。

12時を回った時計を見ながら、俺はなんだかどうでも良くなった。

ススキノのネオンは怪しく、日が変わっても消えることはない。

俺は、道路に身を投げた。

身を投げた瞬間、雲間から晴れた空が見えた。空には天の川。

そっぴゃ、今日は七夕だっけ？

願いは何にしよう。

「もどけてえな」

口にした瞬間、トラックが目の前をふさいだ。そうして、視界は闇に消えた。

男は、目を開けた。

チュンチュンという鳥の鳴き声がさわやかな朝を演出しているのにもかかわらず、男の頭は重かった。

時計を見る。

「7月6日AM9:32」

ぼんやりとして少し立った後、携帯を手を取った。

カレンダーをチェックする。

「2007・7・6」

どうやら、願いは聞き届けられたらしい。

元に戻ったのは、男の意志だった。

どこの誰がかなえてくれたのかはわからないが、俺は大きな力に抗ったのだろうか。

それともこれらも全部、シナリオの中なのだろうか？

わからないけど、とりあえず男は携帯の発信ボタンを押した。

「・・・はい、はい、ええ、すみません。先方にはくれぐれもよろしくとお伝えください」

今日一日晴れて自由の身になった俺は、カーテンを開けた。

曇り空だったけど、男は知っていた。雲間から流れる天の川が見えることを。

そして、一喜一憂しながら生きるこの俺の人生を、仮に誰かが見ていたとしても、操作していたとしても、楽しむこともできるってことを。

男は携帯を開き、もう一度発信音を押した。

「ああ、突然すまん。いや、今日会えないかなーなんて。だって、明日は七夕だし」

（後書き）

ちなみに、僕の人生のともなく大事な日の前の日に書きました。
なんか思つところがあつたんでしょう。今となつては、謎ですが…
ちよつと戻つてみたいかなーなんて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7188o/>

～ 7月6日曇り時々晴れ～

2010年11月5日02時44分発行